
異世界冒険モノ（タイトル仮）

年齢をとっくに過ぎていたり過ぎていなかったりするぺらぺらとしゃべってぺたぺたと貼る変な人のようなみかんのようなもものようなりんご的なのにかた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界冒険モノ（タイトル仮）

【Nコード】

N0305Y

【作者名】

テスト中の小説集書いてる適当な年齢をとくに過ぎていたり過ぎていなかったりするぺらぺらとしゃべってぺたぺたと貼る変な人のようなみかんのようなものようなりんご的ななにかだと思わせ
てジェル状の物体その2

【あらすじ】

異世界に召喚されたらしい成り上がり家庭のお坊ちゃま。とてもお坊ちゃまとは思えないほどの言葉遣いではあるものの、真正銘のお坊ちゃま。馬鹿を演じているが、中身は超腹黒。

注意

更新ペースは不定期です。言葉遣いが荒いためご注意ください。こ

都合主義が含まれています。ハーレムはありません。主人公滅茶苦茶強いですが、はじめからチートではありません。今後キーワードが増える可能性があります。

地理とそれぞれの特徴をまとめた資料（1章）（前書き）

地図と共に国家ごとの特徴を書き記します

地理とそれぞれの特徴をまとめた資料（1章）

> i33825 — 4292 <

【商業国アラビア商国】

その名の通りの商業国。商業ギルドの本部がある。この商業ギルドが国のトップである。商会20組の議会制で、市場の流通価格や販売基準、販売方法や契約法律など様々なものを決めている。

国民の大半は商人で、他の国に行商へ行くものも少なくない。商人以外は農業や漁業、商会の下働きをしている。基本的に国民性は働き者、武力ではなく金や舌で勝負する。争いごとを回避する傾向があるが、商人になる最低限の戦闘能力を国民が所持しているため、戦争になれば他国に引けを取らない。

現在は奴隷商人について認めていないため、奴隷商人の絶対数が少ない。

『同盟国』

すべての国家（ソロノア・ヴルジア・ガディア・フレジア）

『敵対国』

なし

【中立国ソロノア連邦】

中立国、と言うがヴルジアとの間で小競り合いが絶えない。もちろんソロノアが仕掛けたわけではない。都市のひとつが冒険者ギルド本部を中心として形成されている。

大きく5つの都市に分かれており、国の中心は砂漠になっているため、都市が築けない。5つの都市が同盟を組んで国家を形成しており、それぞれの都市での相互支援、人員移動、基本的な法律の統一化が成されている。

国民の大半は農民で、国民数が他の国の倍近くいる。また魔術師が多く、武人は少ない。国民性はのんびりしている者が大半で、神経質で真面目な人間は他国へ流れていく。

『同盟国』

アラビア

『敵対国』

ヴルジア

【軍事国家ヴルジア帝国】

紛れも無い軍事国家。侵略と侵略と侵略を繰り返す血の気の多い国。ソロノアとガディアに攻め込んでいるが、なかなか落とせず冷戦状態となる。

首都と2つの砦で成り立っており、地図右奥に進むと魔物が大量に発生しており、背後・前方2国の3つと戦っている。

首都には皇宮があり、王族が暮らしている。王族は代々優秀な武人であり統治者としての能力も兼ね備えているが、代わりに魔力を持たないという特徴がある。王族と婚姻するためには実力を示さなくてはならない。

(例：武術大会優勝・ギルドAランカー・戦時に功績を挙げる・魔物の侵攻時に功績を挙げる、など)

貴族はおらず、魔力を持つものが圧倒的に少ない。代わりに『闘技』と呼ばれる業を使う。武人が多く、アラビアに頼りきっている傾向がある。

『同盟国』

アラビア

『敵対国』

ソロノア・ガディア

【神聖国ガディア神国】

神を崇める国家。実際に神は居るので宗教団体ではない。ウルジアとの戦争で手一杯のため、ソロノアとは敵対していない。

神殿の有る場所が首都。神様至上主義。神に祈りをささげ『神術』を使える者が一番偉いと思っている。神官長・貴族（神官）・信奉者・その他の順に偉いという思考。

民のほとんどが神様至上主義で、貴族が多い。神官長は貴族にしかなれないが、平民でも神官になることは出来る。

神術が使える後継者が居ないと平民に落とされる。逆に平民でも貴族になることは出来るが、条件が厳しい。

法律も『神の名の下に』行使されるため、神を欺かなければ公平な判決が下る。魔術師を毛嫌いする傾向は現在のところないようだ。

『闘技』は扱えない者が大多数。

『同盟国』

アラビア

『敵対国』

ウルジア

【亜人国フレジア】

人間族以外が住む国フレジア。魔の森に面しているが、亜人の特性を生かして退けている。

それぞれの集落があり大体の縄張りも決まっているが、助け合いながら暮らしている。

亜人としてはエルフ・ドワーフ・獣人・竜人など様々な者がいる。

年に一度、各氏族の長が集会を開く。現在の集会長はエルフの長がつとめている。

『同盟国』

アラビア

『敵対国』
魔の森？

【魔の森】

強力な魔物が徘徊する森。中心部はAランカーがパーティーを組んでも怪我を負うほどの強さ。まとめ役はドラゴンの様ではあるが、魔族の姿が見かけられるようだ。

> i 3 3 8 2 6 — 4 2 9 2 <

?
様々な集落が点在している。亜人族しかいない。海に面しているが、海にも強力な魔物が多く魚はほとんど取れない。

?
強力な魔物が生息している大陸—大きい森。?には森が地続きになっているので移動できる。

魔物は森から500m以上は離れられないようだ(他の森も同様)。どうして離れられないのかは学者達が首をひねっている。最近魔族が動くようになった、と冒険者からの報告が上がっている。

?
商国の主に農業地域
国境線がゆるく、亜人の通り道にもなっているのは周知の事実。商人は亜人を商売相手としてみるため、毛嫌いしない。

?
商国の主に漁業地域
ガタイのいいおっちゃんが多い

？

商国の主に産業地域

技術者が多い。神術士、魔術師、闘士（別名：武人）なども研究材料として借り受けている。もちろん給金も有る。

？

産業地域に隣接しており、人員の貸し出しをする代わりにいち早く品を手に入れることが可能。
主に魔術師が住んでいる都市。

？

冒険者ギルドの本部がある街。つまり冒険者の町。登録もここで行えない。

亜人を差別しない街でもあるため、ここにきたがる亜人も多い。

？

鉱山都市と呼ばれている鉱山がたくさんある都市。
武器の生産が主な仕事。

この都市以外でも生産されているが、数を作るのはこの都市が適している。

？

スラム街。ああスラム街。スラム街。
スラムが多く、すべての孤児がここに住んでいるといっても過言ではない。稀に神聖国ガディアが施しを行う。

ここのリーダーが実質上の街のトップで、さまざまな外交をこなしている。

スラム街といっても（死なない程度の）最低限の生活は行えるし、派遣の仕事が大量に入ってくる。

暴行は多発するものの、殺しなどは罪に問われるため半殺しが多い。人数が多く、それなりに強いものが多数。冒険者の大半はこの出身。

？

最強の都市。ソロノア。

人数が一番少なく土地の範囲も小さいが、戦の才能を持つものがここに集まる。

実質上のヴルジアとの戦争相手。

数より質のこの国家は国民の総意で代表を決めるというアメリカンな都市。

好戦的なものも居るが、大抵は温和。強すぎるために弱い相手とは戦いたくないというのが彼らの思いのようだ。

(例：国家の最強100：ソロノアの民30：兵士1：一般人0・5)が目安の強さ。

国の民の中で決闘で決着をつけることが多い。余談だが、夫婦喧嘩も決闘で収まるという……。

？

ソロノア攻めの主要の砦、街というほど民間人数は多くない。基本商人と武人が多い。

？

帝国の中枢、皇宮が有る場所。男でも女でも強ければいい街。

4年に1度だけ武術大会が開催され、その間と前後は戦争をやめる。武術大会中は大陸一の賑わいを見せる。

亜人も強ければ尊敬の目で見られる。

？

ガディア攻めの主要な砦、街というほど民間人数は多くない。基本

商人と武人が多い

？

神殿が存在する街。

神術士が多く、神が光臨する街。

？

古代の遺跡があり、魔物が徘徊している。

Cランク以上の冒険者がそれに準じる強さが無いと入れない。

現在はダンジョンと呼ばれ、地下62階層まで攻略は進んでいる。

1階層ごとに強力な魔物が出てくる。77階層が最終地点だということ。50階層時点で判明している。50階層以下は強力な魔具が多数存在している。

エルガディアの教科書より抜粋（1章）（前書き）

ネタバレを含まない程度に書きたいと思っています

エルガディアの教科書より抜粋（1章）

「世界の成り立ち」

あるところに神がいました

神は番の女神つがいと共にこの世界を見守っていました

ある時、エルガディアの大地をいとおしげに見つめる神の姿に、女神は嫉妬しました

彼女は魔物を生み出し、魔物はエルガディアの大地の動物達を捕食していきました

魔物には知能がなく、同じ魔に属するもの以外に敵意を向けました
爆発的に増殖する魔物に、神は対抗する動物として人間を生み出しました

しかし、成長をする人間と、爆発的に増殖する魔物はどんどん増えていきました

人間以外の動物達は、身を守るために魔にその身を落として魔獣となりました

魔の力のない人間は血肉を与える存在を狩れなくなったことで、衰弱していきました

神は人間たちを哀れみ、魔力を授けてくれました

い。亜人間・魔獣を嫌う傾向がある。

・亜人間

魔獣との間に出来た半人間。魔力を持つものも持たないものもいるが、純・魔人間と比べると一部の能力が突出している。代わりに他の能力は低い。

・魔獣

魔に身を落とした獣。獣としての能力が高いと言語を理解・使用することが出来る。獣が魔に身を落としたことで突然変異した種族も多い。魔人間を嫌う傾向がある。

・魔物

女神に生み出された魔物。森から500メートル以上離れることが出来ない。分裂することで数を増やすが、増やしてから数日は能力が落ちる傾向がある。一年に一度、夜にだけすべての魔物が必ず分裂する時間があり、『悪夢の夜』と呼ばれている。大半は魔の森に住んでいるため、人間に被害はない。死亡後、砂となる

・魔王

人類と同じ知能を持ち、異常な強さを誇る魔物。この魔王が生まれると魔物たちは森から出ることが出来るようになる。魔物たちを指揮することが出来るため、魔物の数を常日頃から削っておく必要がある。死亡後、砂となる。

・神人間

魔王を人間が倒せなかった時に現れる人間。勇者の総称。神の加護を持ち、訓練すれば最強の生き物になることができる。死亡後、光となって消える。

ある。

これらを四季と呼び、地方によっては若干の誤差がある。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

「最近の出来事」

- アルカディア歴732年 -

神人が別の世界から来訪し、大いなる災いをしりぞけてアルカディアを救った。

しかし彼は10年前、パーティーメンバーの1人、ジュリア・ガレシアをつれてこの世界を去った。

彼の魔法は強力で、変身ポーズからの水の鎧や剣と、水の竜をまとった姿は見たものを畏怖させた。

彼は自分の姿を竜騎士と呼び、初めて魔法を使った時は感動に打ち震えたそうだ。

彼の活躍を知りたい民の声に答え、共通言語『日本語』というものを生み出して『新聞』を配布した。

民達の識字率は上がり、ほとんどの民は『日本語』を覚えた。この活躍により、共通言語が使用されることとなる。

中でも計算式なるものは商人たちの間でとても賞賛されたという。

彼の名をリ्यू・ジ・レンドーとしよう。

エルガディアの教科書より抜粋（1章）（後書き）

こんなものでどうぞでしょう。

無理やり感が出てますが、これをお願いします。

ギルド規約・ギルド案内（1章）（前書き）

今回はギルド規約とギルド案内についてです。

これにて1章の資料を終わります。

1章より以前に見てもネタバレしないだろうし、伏線も張ってあったり、見ないと説明していない部分などありますので資料集はなるべく読んだ方がいいでしょう。

説明回は面白くなる傾向があるかもしれないしなにかもしれないのでとりあえず資料集だけ書き出してみた次第です。

ギルド規約・ギルド案内（1章）

【ギルド規約】

1．種族の不平等無く接すること。敵は魔族と魔獣、魔王のみ。
（使い魔の印をつけているものは例外とする）

1．依頼達成は法に触れないならばどんな手段も可能とする。
（どのような方法をもちいてもその人物の実力であることに変わりはない）

1．善民に迷惑をかけるべからず。過ぎる場合は制裁を加える。
（善民は国の宝である。善民を貶める行為は国を敵に回す行為である）

1．その他ギルドに不利益が生じる場合これに制裁を加える。
（本部ギルドにて裁決を下す）

1．冒険者は自由である。権力での依頼は蹴ってよい。
（絶対に引き受けなければならぬわけではない）

【ギルド案内】

・ギルドの登録

各ギルドで登録可能。虚偽の申告も出来るが、採血するため確認をすれば分かる。

採決時に血を別のものに変えた場合、ギルド総出で制裁を加え、適した処罰を与える。

・ギルドカード

D / 青 ≡ 30000ポイントと各ギルドの判断（普通の冒険者）
C / 赤 ≡ 100000ポイントと各ギルド長の判断（上級の冒険者）
B / 金 ≡ Cランクで特別依頼達成数10以上（特上級の冒険者）
A / 白銀 ≡ Bランクで本部ギルドマスターの許可（伝説級の冒険者）
S / 白 ≡ 偉人に与えられる称号（神話級の冒険者）

Sランクは過去リユージのみの特別ランク。

・依頼について

依頼板より依頼を選んでカウンターに持ってきてください。

条件にあっていない場合は拒否させてもらいます。

依頼には討伐・護衛・採取・雑務の依頼があります。

依頼を達成できなかった場合は違約金を払ってもらいます。

討伐は何人でも受けていて、終了するまで続きます。違約金は安いです。

護衛は固定人数が受けたら終了とさせていただきます。違約金は高いです。

採取は何人でも受けていて、需要が間に合うまで続きます。違約金は安いです。

雑務は固定人数が受けたら終了とさせていただきます。違約金は普通です。

・魔物について

魔物は森において、普段は森を離れません。森を離れているものは魔獣です。

魔物よりも知性のある魔獣のほうが強いので、初心者は逃げまじう。

死なないように万全の状態になってから魔物を倒しましょう。死亡後は魔物は砂になりますが魔獣は死体が残ります。

・魔石

魔物を討伐したとき、『魔石』と呼ばれる黒い玉が落ちます。

『オープン』で魔具、魔物素材、その他に変化します。

変化のときに光が出ます。魔具は白、魔物素材で黒、そのほかは灰色となります。

すべて定価で買い取りをしているので『オープン』状態でうってください。採取依頼でも依頼があります。

討伐任務では『オープン』せずに『魔石』のまま持ってきてください。確認後、『魔石』は返します。

・札

雑務・護衛は依頼の紙をもらい、そこにサインしてもらうことで完了とします。

サインを済んだ場合はこちらで対処・補償させていただきますのでご報告してください。

・魔獣

危険な魔獣です。特別任務になることがほとんどですが、たまに依頼板に出ています。

暴走している魔獣が多く、見境なく襲ってきます。討伐後に指定の部位を採取してきてください。

・魔法

四芒星から七芒星までの魔法陣に言霊を組み込み、魔力を流して発動させる。これを魔術という。

四芒星Ⅱ 下級魔法
五芒星Ⅱ 中級魔法
六芒星Ⅱ 上級魔法
七芒星Ⅱ 神級魔法

現在七芒星までしか発動させることは出来ません。強い魔法は魔力を多く失います。

魔法陣を見て言霊が見える人物はその魔法陣までの魔術を扱う才能があります。なお、魔力量が足りない場合は解析が出来ても発動できません。逆に解析できない人はどんなに魔力があろうとも魔法陣は組めません。

・闘技

体内の生気を内部で操作するもの。

経験者の指導の下で自身に合った方法で使うのがコツ。

個人個人で操作の仕方が違う。

・その他

冒険者としての腕が上がり次第順次お知らせいたします。

・ギルド内について

1階の正面がギルドカウンター、左が素材買取所、右が魔具・その他買取所、壁一面にランクごとに依頼。

2階は談話室となっていて、ギルドごとに内装が違います。本部ギルドではシャワーや軽食、お菓子が置いてあります。

お坊ちやまの生活（前書き）

本作品は独断と偏見により書き進めております

お坊ちやまの生活

とある高級マンションの一角。そこには俺の寢床がある。

3LDKという無駄に広いこの寢床で寝るようになってから2年。

俺は特に感慨を抱くことも無く来客用に設置したはずのソファに寝転がる。

一人暮らしだからといって別に両親がいないわけではない。おそらくは両方とも健在だ。

成年したわけでもなく、未だ高校2年の俺はあの居心地の悪い家に居続けたくは無かったのだ。

うちの両親は良くも悪くも放任主義だし、金も有る。

会社を設立し、1代で富と名声を築きあげたやり手な父親。それを影ながら支える母親。

普通ならば跡を継ぐのだから厳しく教育されると思うだろう？でもそれはありえないんだ。

なぜなら俺は2番目だから。次男であるからして継ぐのは長男に任せるのが筋だろう。

だからこそ俺はまるでいないように扱われてきた。使用人ですら俺に敬意を払うことはしない。

ある一箇所の本棚の前で本を数冊抜き差しすると、本棚が手前にゆっくりと移動する。

本棚の裏側にあつた穴には入らずに本棚があつた場所の床を探ると、穴の奥から「ゴー」と重厚な音が聞こえてくる。

「ももとの穴は罫が張つてある。お前も入るときは注意しろ」

音が鳴り終わるとジュラルミンケースの山が現れる。そこは金庫であり、一つにつき5000万円ほど入っているらしい。

ポイツと5000万円ほど入つたジュラルミンケースをまるでペツトに餌でも与えるかのように投げて寄こしてきた。

(まあ、厄介払いといえれば正しいか)

俺はそれをうまくキャッチして馬鹿親父に話しかけてみる。

「縁は切らないのか、体裁悪いしな」

「ああ、そうだ。お前は理解が早いが、次男だからこそ邪魔になる。金が入り用ならいつでも払おう。」

穴の中のボタンを押して出てきた馬鹿親父は、本棚の本を元に戻しながら声だけをこちらに届けてくる。

「そうかい、次男は独り暮らしを夢見て出て行った。心配だから金は渡してあるし見張りという名の監視もつける、ってか？」

本を戻し終わり、本棚が移動するのを確認したあとこちらに鋭い目を向けてくる。

「本当に理解が早くて助かる。うちの邪魔はするなよ」

「わあつてるつて。ああ、もし俺が行方不明になったら馬鹿が金を持って逃げたつて設定でよろしく」

「こちらとしても行方不明のほうがありがたい。後継者は長男に決まっているというのにお前に取り入ろうとする奴等が多くてたまらん」

この言葉だけで伝わるだろう？と挑発を混ぜて織り込んだ言葉に顔色を変えずに返答してくる。さすがだな。

「馬鹿だという設定だしな、操りやすいとでも思ったんだろ。いつも通りの馬鹿を演じておいたよ」

「じゃあな、馬鹿息子。お前は私の血を色濃く受け継いだのだから大丈夫だろうとは思うが、惜しいな」

「じゃあな、馬鹿親父。一番の後継者を手放したことを一生涯悔いと良いさ」

これはいつもの会話、だがやはり少量の悲しみが混ざっているのは仕方ないといえるだろう。

『最後の別れ』では無いものの、家族としての会話はこれで終わり。今後は取引相手として話しをするだろう。それが俺と馬鹿親父という親子の形であった。

住民は女性8割男性2割といったところだ。お嬢様がほとんどで、警備員とは別にボディガードをつれている。

男性陣も名家の御偉いさまがほとんどで、間違いが起こっても申し分ない身分ばかりだ。

俺は成り上がりなため、好印象はもたれていないが警戒もされてない。

俺の演技の賜物だろう、社交パーティーではあらゆる女の子に声をかけては俺のボディガードに引きずられていく。

最終的にボディガードが引きずっていくため、娘の『お話し相手』と『社会勉強』としては申し分ないだろう。

俺のボディガードは8人で、側で控える2名と影から観察する2名が基本配置で、それを1時間毎に片方ずつ交代する。もちろん休み中も緊急事態に備えて待機している。

休みは1年に数日程度だが、日給10万程度なのだから破格の待遇といえるだろう。

年齢は現在25〜30歳で構成されており、定年は35歳ほどで、定年後は家付きの執事として雇われる約束だ。

話が長くなったが、この8人は馬鹿親父の手の者であり俺の暴走を止めるための人物であり、俺の休む暇がほぼ無い。

トイレの時と学校の授業中以外は側に必ずついていて、本性が出せずに馬鹿息子を演じるしかない、忌々しい。

(身動き取れねえじゃねえか、いつそ本性晒すか？ダメだ、メリツトが小さすぎる)

ソファに備え付けてあるクッションに顔をうずめながら苦い顔をする。

以前の生活なら馬鹿親父と母のみの場所なら本性を出すことが出来た。以前の生活が恋しくなってきたが、それに蓋をして考えをめぐらせる。

(おそらくだが、ボディガードの目を振り切り田舎へ逃亡すれば馬鹿親父は搜索を中断するだろう。母も俺の本性を知っているから止めはしまい)

(だとすると、ボディガードを振り切るしかないわけだが・・・)

俺は考えをめぐらせ、一番馬鹿で大胆な、しかし成功の確率が最も高い方法をとることにした。

(勝負は、明日)

朝の一幕(前書き)

本作品は独断と偏見により書き進めております

朝の一幕

「う……う……」

体が動かない。

「隆久様たかひさ、お水でございます」

そばにいたボディーガードの一人がコップを傾けてくる。

「ぷ……はぁ……」

コクコクと飲んだ後、ゆっくりと意識が覚醒してくる。体の節々が痛いのはなぜだろうか。

「おはよ、いま何時？」

起き上がり、寝ていた場所がソファであったことを思い出して一人納得する。

体の痛みが取れるわけではないのだが、原因が分かってやっと一息つける。

「現在7時半でございます」

この寢床から学校までは徒歩10分ほどだ。元々、高級マンション自体がうちの幼稚園組みから大学までのエスカレーター学校専用で作られたらしいから納得だ。

朝食を食べ終わり学校へ行く準備をしてもらう。俺は歯磨きを終えてトイレへ入る。

(うはぁ・・・めんどくせえ)

やっぱりいつ見ても抜け出す穴が無い。協力者を探すなんてことも出来はしないだろう。

(やっぱりアレしかないな)

長すぎると強制的にトイレから出されるのでとりあえずドアを開ける。予想通りトイレのドアの前に一人。

「いつも思っただけどさ」

「なんでしよう隆久様」

「わざわざドアの前に仁王立ちしなくて良いだろ」

透視能力でもあるのかと言いたくなるが、それは我慢しておこう。本当に会ったらすごく嫌だ。

「いつも同じ質問でいらっしやいますね、隆久様。貴方が初日に逃げようとしたからでございます」

「うっ・・・」

そうなのだ、初日にトイレ内に監視がついていないのをいい事にドアを開けた瞬間走って逃げたのだ。速攻で捕まったけど。

ちなみにトイレの窓の方は双眼鏡で監視されていた。顔を出して確認したらいたから間違いない。もしかしたらそのせいですぐに捕まったのかもしれない……。

「まあそれはおいといて。準備終わったら行こうか」

「今日の授業は1時限目・数学、2時限目・歴史、3時限目・体育、4時限目・生物、5時限目・国語、6時限目・学園祭の準備となっております」

「了解、んじゃ行こうか」

ボディーガードからかばんを受け取ると、家のドアを開けて待っているもう一人のボディーガードがいた。

「異常なしです」

いちいち確認しなくてもいいと思うのだが、確かにドアを開けた瞬間が狙われそうではあるな。

「ご苦労さん」

俺が労いの言葉をかけるとふっと苦笑した気がした、気のせいかもしれないが。

エレベーターに向かっていく途中に警備員数人に会ったので「おはよう」と挨拶しておいた。全員まったく同じポーズで敬礼するだけなのだから異常に怖い光景となっていた。もう慣れたけど。

エレベーター前につくと先客がいた。とてもお嬢様という名前に似つかわしくない活発的な友人だ。

「おーっす」

「おーっす！」

俺が挨拶をすると向こうもかなり碎けた調子で挨拶を返してくる。振り返った拍子に赤い髪が流れる。顔立ちは美少女なのだが、いかんせん性格がなあ……。

「なんかひどいこと考えてる気がするんだけど？」

そして勘も鋭い。身長は俺の鼻ほどの高さで女子としては平均的な身長ではあるが、やはりその顔で上目遣いはやめて欲しい。本気になったらどうしてくれる。

「いやあ、亜衣はいつも通り可愛いなあって」

「むー。この天然タラシが！」

いや、天然タラシじゃないよ、腹黒だけど。ちょ、やめて痛い痛い！

「痛いわ！」

俺の脛を蹴り上げてくる亜衣にスコンとチョップをかます。亜衣のボディガードにすっごい睨まれたが気にしない。

そんなバカをやっているとエレベーターが降りてくる。扉が開く

と俺のボディガードの片方が先に入り異常が無いか確認する。確認が出来ると俺と亜衣が乗り込み、残りのボディガードが乗り込んでくる。

「さすがに5人いると狭いな」

俺、亜衣、亜衣のボディガード1人、俺のボディガード2人で計5人。いや、12人乗りなただけだね。

「そんなこと言いながらお嬢様の側に行こうとするんじゃないよこのクズ」

亜衣のボディガードで、3人のうちの1人、コードネーム猫さんが話しかけてきた。

亜衣自身が相当強いのでボディガードは1人で事足りるらしい。確かに男に腕相撲で勝つ亜衣は怖い。かなり細身なのだがどこにそんな力が隠されているのだろうか。

「嫌だなあ猫さん。貴方に近寄ろうとしてるんですよ?」

「ひいっ!」

手をわっしやわっしやと胸をもみしだくように動かすと、猫さんが悲鳴を上げながら後ずさる。やばい可愛い。

「隆久様。すぐにその変態的な顔をどうにかしないと危ないですよ」

俺のボディガードが忠告してくる。何が危ないのだろうか。

「このっ！隆久の変態！よりもよって猫ちゃんに！」

「ごっ！がっ！くぼお！」

腹に膝蹴り、同じ足で後頭部に回し蹴り、逆足で前蹴り。ちょうどエレベーターが開いて俺はそのまま数メートル吹っ飛ぶ。

1階エントランスホールに突然現れた俺塊にピリツとした殺気が各主人のボディガードと警備員から放たれるも、俺隆久だと気づくと納得した雰囲気が変わる。

「またか、隆久様は……」

「今度は誰に何をやったのか……」

「きつとまた無理やりキスをしよう……」

「いや、胸をもみしだこうと……」

「どちらにせよ最低です……」

各々の反応おのおのに反論を唱えたくなるが、微妙に当たってる部分がある。で何もいえない。

口も体も動かさない俺はエレベーター内部からの全員の蔑みづんだ視線を感じながら意識を手放した。

昼の一幕（前書き）

本作品は独断と偏見により書き進めております

昼的一幕

「う……っ……いつ……」

夢から覚めた俺はあまりの痛さに強制的に現実へと引き戻された。

その痛みであれが夢でなかったことが分かる。亜衣の手加減なしでの蹴りは後々に響くことを今日学んだ。

「あゝ、痛かった……」

とりあえず周囲を見回してみる。広い部屋に机がたくさん、周りには誰もいない……。

「うっそ、もう放課後かよ」

ふっと外を見るといまだ晴天で、夕日も月も出ていない。

しばし呆然としてしていると、外から声が聞こえてくる。

「走れ走れ！」

「ボールそっち行った！」

「このっ！ちよこまかと！」

聞き覚えのある声が聞こえてくる。ふと窓の外を見ると、グラウンドに白線の中で戯れる男女の姿が。

「ドッチボールか・・・」

今朝見た赤い髪もキラキラと輝きながらあつちにこつちに・・・。

「おはようございます隆久様。現在3時限目終了の5分前でございます」

ビクッ

「あ、おはよう。いつからそこに？」

いつの間にか俺の背後に現れたボディーガードに驚きながらも質問を投げかけてみる。

「初めからでございます」

ボディーガードは一本指を立てて上を指した。つられて視線を動かすと。

「穴・・・開いてるな」

「大丈夫でございます。穴が開いたように見えるのであって、実はボディーガードが10人ほど隠れているだけです。後でふさぎますよ」

「いや、それは見えるんじゃないかって開いてるんだよね？」

「気のせいです」

はぁ・・・、とため息をつく穴の中からいくつかの視線が降り

かかる。ぱつと見てみると猫さんまでいるな。

「猫さん、亜衣の警護は？」

「亜衣様の名を呼ぶなど変態。鷹に任せてある」

「あ、鷹さんきてるんだ」

鷹さんとは亜衣のボディガードの1人なのだが、もちろん本名ではない。亜衣が動物の名前で呼ぶからだ。普通はボディガードに名乗る名前なんて無いんだが、亜衣の一存でニツクネームが強制的に決まった。

「とりあえず、つと」

俺が教室に引いてあった布団から出ると、ボディガードが片付けていく。丸めて上へ・・・あそこ倉庫だったのか、いつもなんでも持つてるからどこに隠してるのかと思ってたけど。そして猫さんは布団から大げさに逃げるのやめて欲しいです。

「そろそろみんな戻ってくるし隠れてすぐに穴ふさいだ方がいいんじゃない？」

「クズにしてはいい案だな、撤収するぞ」

「では隆久様、強く生きてください」

ボディガードたちは猫さんと俺のボディガードの2人からの言葉を残して天井裏に帰っていった。

それと同時にざわめきが近づいてくるが、男連中の声しかない。女は着替えるの長いしなあ。

「うーっす」

「あれ、起きたんだ隆久？永眠してればよかったのに」

「馬鹿が起きたぞー！」

「この間渡したエロ本どうだった？あの腰のくびれがなんとも・・・」

「女子とドッチボールしてきたんだぜ、触れようとするとボディガードからの殺気が飛んでくるから触れなかつたけどな。隆久がいれば・・・！」

俺はつまり、変態的な行動を取る馬鹿、男子連中のムードメーカーという立ち位置を獲得していた。

（まず初めの計画は失敗だな。体育の着替え中が一番逃げ出せる確率が高かつたんだけど）

特に俺のようなやつなら女子の更衣室に行く振りして逃げるのは容易かつたんだが、ままならないな。

「どーしたよ？変な顔して。隆久にはそんな知的な顔は似合わないぜ」

くっくくくと笑っているやつに腹パンを入れて少し引っかかった言葉を発したやつに向き直る。

「いいか、ボディーガードは所詮ことに及ぶまで殺気を放つしか出来ない。だからこそ思いつきり突撃するんだ。ただし運動の出来る女子は避ける、かわされたら何も出来ずにボディーガードに半殺しにされるからな」

「さすが隆久！参考にさせてもらう！」

「ふっ・・・いつでも頼れ」

そんなことはできないだろうがな。箱入りの娘を狙うと触れる直前で叩きのめされるし、運動できる娘はよけられた後に本人にボコボコにされた上でボディーガードに折檻されるからな。もちろん両方とも体験談だ。

だがしかし！俺は努力の末に運動できる娘のうちの1人、亜衣に抱きついたことがある。あの時は亜衣が顔を真っ赤にしてもじもじして可愛すぎた。思わず頭とか背中とか腰とかお尻とか撫で回してしまっただな。

もちろん後で酷い折檻を食らった。亜衣からの攻撃が無かった分、良かったのか悪かったのか・・・。

鷹さんにホースを口の中に入れてガムテープで固定されて、さらに足かせに鉄球をつけられて水深5メートルほどの湖に沈められた。数時間ごとに引き上げられてはまた沈められるんだ・・・は・・・。

「隆久が遠い目をしているぞ！感触か！女子の感触を思い出しているんだな！」

「くっそー！羨ましい！俺だって馬鹿でさえあったのなら！」

「いや、お前も馬鹿だろう？やはりここは僕が・・・」

こんな会話は女子が着替え終わって戻ってくる時まで続いた。

ちなみに余談だが、女子の男子へを見る目が侮蔑の表情になったことは言わなくても分かるだろう。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

生物の授業が終わり昼休み、昼食を食べようと立ち上がる。この学校は昼食は弁当派・食堂派・コック派に分かれている。

まず弁当派。これは名の通り自分で弁当を作ったり親に弁当を作ってもらったり料理人に弁当を作ってもらっている。稀にコンビニ弁当のやつがいるが、大抵の場合は彼女に弁当を作ってもらえなかったという理由からだ。

次に食堂派。これが一番数が多い。値段も200円から上は20万円までとレパートリーも豊富だ。キャビアやフォアグラなんてものは普通で、よく分からない生物とか絶滅危惧種っぽいモノとか保護団体が出てきそうなものである。特に『今日の絶滅危惧種 20万円』とか言っちゃダメだろ！？高額裏メニユーで『今日の絶滅種 1000万円』とかあるらしい。これは学園七不思議のひとつで信じる人間は少ないが、俺は絶対に信じる。

最後にコック派。弁当派より人数が多い。学校のコック室で昼食を作るのだ。わざわざ料理人を連れてきて材料も調達して・・・正直俺にはできない。コックなんて雇えないし。平然と使ってるのが恐ろしくなるな。

いろいろ言ったが、俺は食堂派だ。低額裏メニュー『素うどん80円』や『何かの焼肉20円』とかを好んで食べる。低額裏メニューの出現条件は『具なしカレー200円』を1年間食べ続けることだ。おそらく七不思議も20万円のを食べ続けるのだろう。

「じゃ、食堂行きますか」

「隆久様、コックくらい用意できますが」

「無駄遣いは嫌いだ」

「隆久様は面白がっているだけでしょ・・・」

分かってらっしゃる。確かにボディーガードに何かの焼肉を毒見させてはいるが、そんなに嫌かね？

.....

なんだかんだで食堂にやってきた俺とボディーガード一行。食堂に入り適当な席に着く。

「いらっしやいませ。」「注文をどうぞ」

機械的な音声が届いてくる。これは各テーブルごとに備え付けられた小型の液晶画面から届いてくるものだ。

無駄に金がかかっている。耐水仕様だし埋め込みであるしタッチパネル搭載だし。

「隆久様は裏メニューがごらんになれますが、いかがなさいますか？」

「低額裏メニュー『天才と紙一重の闇鍋（50円）』をお願いします」

「かしこまりました。ポディーガードの皆様も同じものをお持ちいたします」

それにしても最新のAI技術はすごいな。顔認識までできるとは。。。

「隆久様、その『天才と紙一重の闇鍋』とはどんなものなのでしょうか？」

「馬鹿みたいなものを闇鍋に入れるんだよ。もちろんポテチとかマシユマロはデフォで入ってる。稀に本当においしいものが出てくるが、やばい時は吐きそうになるくらいだな」

もちろん毒見はポディーガードに頼むが、死にはしないだろう。前回食べさせたポディーガードは吐いたが、毒が入っていたわけではない。大丈夫だ、問題ない。

「私はそこはかとなく不安になるのですが、隆久様は不安にはなら

ないのですか？」

「もちろん君達に毒見をしてもらつから問題ないよ」

「そ、そうですか・・・」

ボディーガードの不安をあおる話をしているうちに料理がやってきた。この料理人は値段ごとに料理する料理人が違う。もちろんまずいものなら即解雇されるのだが、低額裏メニューの料理人は毒を作らない限り解雇されない。

料理を運んできたのはその料理人で、顔にはニヤニヤとした笑みを貼り付けている。この顔の時はものすごいものができた時だ。良^くも悪^くも、^もが^も付^もく^もの^もだ^もが^も・・・。

「こちら、『天才と紙一重の闇鍋』3人前です。代金はいつも通り口座からの引き落としでよろしいですか？」

「ども、いつも通りでよろしく」

「かしこまりました。それでは失礼いたします」

踵を返してゆつくりと去っていく。ふとまわりを見渡してみるとこの席から5個分は離れた席に全員座っていた。まるでモーゼのようだ。

気を取り直して蓋を開けてみるとものすごい匂いが漂ってくる。この匂いだけで気絶しそうだ。

「こ、これはなんともカレーと唐辛子とフレンチトーストと焼きマ

シユマロとコンソメスープと焼きマヨネーズと・・・とにかく色々な匂いを足して2で割った匂いのようですね」

「正直この匂いは初めてだ。悪いが2人共味見を頼む」

「はい」

「うっ・・・わかりましたあ・・・」

片方は先ほどまで黙々と横に控えていた方。もう片方はさっきから喋っていた女性の方だ。

2人を椅子に座らせると、3つの鍋すべてを押しやる。

2人共そろそろと口に運ぶと、ままよ！という雰囲気で放り込む。途端に体が跳ねる、毒！？

「びよーーーーー！！！！」

奇声を発しながらのどを押さえる2人。あわてて水を飲ませると、息を荒くしながら感想を告げてきた。

「はぁ・・・ふう・・・そうですね、米がたったご飯と芯のあるご飯を同時に食べたような感覚と、ジヨロキアと大量の砂糖と一緒に食べたような味と」

「美味しい！と思ったたら苦くなったり、すっぱい！と思ったたら不味くなったり」

毒ではない、ようだが・・・。

「よし、これは1人ずつ食べよう。やばくなったらすぐに水を飲ませるんだ」

「はい！水を大量に用意してまいります」

「私は医者を呼んできます！」

パツと退散する2人。10分後には万全の状態が整った。

テーブルは俺とボディーガード2人が席についている。そのまわりをぐるっと囲むように医師や大量の2リットルのペットボトルに入った水、さらに非番のボディーガードまでいる。

「よし、俺から逝こう」

「……ご武運を……！」

その場にいた全員から励ましの言葉を貰いお玉にすくった物を食べる。

「！？」

体が大きく跳ねる。痛い！痛い！え？快感が……痛い！口の中で虫がうじゃうじゃと……あれ？トロッとした蜂蜜の味……口が爆発した！あ、極上の味が……ふああ……炭の味がああつああ！！

そこまで考えたところで水を流し込まれる。ふっと息をつけるようになってから全員を見渡す。

「これは・・・すごいな」

その場にいた全員が闇鍋を食べては俺と同じ感想を述べていく。

結局食べ終わったのは5時限目が終了する3分前だった。

異世界への入り口（前書き）

本作品は独断と偏見により書き進めております

異世界への入り口

疲弊しながらも幸せそうに教室へ戻ると、クラスメイトの全員が不審げな視線を浴びせかけてくる。

「隆久あゝ？授業中どこに行ってたのかなあ？」

「その幸せそうな顔と疲労感・・・その意味することは！」

「アレか！？あれなんだな！一足先に大人の階段を！」

男子連中のそんな憎と怒、さらに羨望の視線と言葉を向けてくる。

正直うざったいことこの上ない。

だが、先ほどから向けられている別のモノを気にしないためのいい材料となっているために文句は言えない・・・。

後ろから激しいオーラとともに侮蔑の視線が大量に向けられている。正直冷や汗が止まりません。

「隆久」

何か幻聴が聞こえる。

「隆久」

何か幻聴が聞こえる。

「隆久」

何か幻聴「がああああ!!!」

「隆久、誰に手を出したのかな？」

痛い痛い頭が割れるように痛い痛い!!

「返事もできないのかな？私の胸とかお尻とか触つといて他の人に手を出したの？」

アイアンクロー状態から離されてほっと一息ついた瞬間、首をつかまれて喉に圧迫感を感じる。

「いあ、落ち、着いて聞いて、くれ、亜衣、君以外に、手を出すわけがな、いし、やないか」

目の焦点が合っていない亜衣、ボディーガードでさえ気当たりで動けない。

静寂が続くなか、俺の弁解が響く。心なしか若干オーラが薄れてきたようにも感じる。

「隆久のその言葉ほど信用できないものはないと思う、だから」

ギンツと俺のボディーガードに視線を送る。全員ビビって動けない。

「隆久がいままでどこで何をしていたか、聞かせてもらえるよね？」

貼り付けたような笑みに、ボディガード達は全力で首を縦に振ること以外はできなかった。

- - -
- - -
- - -

結局、俺の昼休みから先ほどまでの行動を説明し終わると6時限目もあと10分ほどしか残っていなかった。

「隆久のさっきの言葉、うれしかったよ！」

亜衣がその言葉とともに甘えるように首に抱きついてくる。さっきまでの態度とは違ってかわっていて、それが逆に怖い。

「あの〜、亜衣さん？離れてくれるとうれしいかなあ、って」

周囲の温かい視線が痛い。

まるで甘える猫のように抱きついてくる。猫さんも鷹さんも「亜衣様だけを見るなら」と見逃してくれている。

「~~~~~」

鼻歌を歌ってご機嫌な亜衣に俺の言葉は通じないらしい。

先ほどの俺の失言で周囲にカップルとして認定されてしまったため、誰も止めに来ない。

くそっ！これじゃあ他の子に手を出せないじゃないか！

他の小道具係りに任せても大丈夫な範囲だ。

言ってしまったえば、当日の予定は狂わないし誰にも迷惑はかからない。つまりいてもいなくても一緒だと言うことだ。

(亜衣には心苦しいが・・・)

亜衣に心の中で謝りながらもこんにやくを吊るすためのロープに輪を作る。

外れないように固く縛って確認した後、うしろについてきている亜衣に用事を頼んでみる。

「亜衣、ちょっと俺の小道具のプリントを取ってきてくれないか。」

「うん、いいよ。どこにあるの?」

「たぶんかばんの中。俺はちょっと手が離せないから、頼むよ」

「りょーかい!」

『小道具作成の手順』というプリントが小道具係りには配布されていて、小道具の作り方が詳しく書かれているものだ。

隣のクラスの男子に書いてもらったものをコピーしたものだ。対価に秘蔵の女子生徒・女性教師観察アルバムから数枚焼き増しして渡した。教師好きだから頭がいいのか、と真理を悟った瞬間でもあった。

亜衣が俺のかばんのほうに小走りで向かっていく。俺はそれを横

目で見ながらこんなにやく用ロープをつなぎ合わせていく。

「隆久、なにやってんの？それこんなにやく下げるやつじゃん」

「ぶっ！そんなに長くしてどうすんだよ！」

ようやく事態に気づいた俺のボディガード達が近寄ってくるも、もう遅い！

俺は換気のために開いている窓に走る。ロープの間に窓枠を通して輪になったところに手を突っ込む。

ようやく何をしようとしているのかわかったクラスメイト達は慌てふためいている者、啞然としている者、恐怖からか涙を浮かべている者。

亜衣が空気を感じ取ったのかこちらに視線を向けてくる。

「じゃあな、好きだったよ」

そんな言葉を投げかけると同時に飛び降りる。

『シャー』というロープが高速でこすれる音が響く。

「ぐっ！」

突然ガクン！とした衝撃が右手を襲うが、必死に耐える。『バキイ！』と関節が外れた音が響く。とっさにロープを左手で掴む。

「い・・・」

ギリギリとロープが嫌な音を立てる。校舎の壁にぶつかる寸前、体を横に傾けて足で着地する。

「いやあつああああ！！！！！！！」

亜衣の悲鳴が響き渡る。同時にロープから手を離して数メートル落下する。

両足で着地をしながら体を前に投げ出す。ゴロゴロと転がって衝撃を逃がす。

上の階からパニックになったクラスメイトの声が聞こえるが、無視して駆け出す。

校門の前で警備員達が行く手を阻むように立ちふさがるが、俺を見るなり止めるのを躊躇する。

その隙を突いて跳ぶ。警備員の肩に足をかけて、もう一度跳ぶ。見事な二段ジャンプを決めた俺は校門をやすやすと乗り越えて学校の敷地外に身を投げ出した。

おそらく見張っていた方のボディガードが駆け寄ってくるが、俺は車道に飛び出し逆側の歩道に駆けて行く。

バスがちょうど来たため、それに乗る振りをしてバスの影に身を隠す。そのままバスを死角としてブロック塀に登り、さながら猫のような俊敏さで走り続ける。

1本向こうの道路に出るとマンション郡が立ち並んでいる。右腕

を無理やりはめて激痛をこらえながらマンションとマンションの間を進む。

壁に寄りかかり、発信機が仕掛けてあるものをすべて脱いでいく。ブレザー、Yシャツ、ストラップ。ズボンは発信機の部分だけを破り取る。

マンションの間を通り抜けて歩道を走る。信号待ちのトラックの荷台に発信機付きの衣類を放り投げていく。

ズボンの発信機を持ち自分も荷台に飛び込む。信号が変わったのかトラックはそのまま走る。

頃合を見て、ズボンの発信機を残して飛び降りる。そのまま10階建て程度のマンションの裏側に行き、不法侵入をする。

例の隣のクラスの子の家のここの7階である。1人暮らしで、たまに遊びに行ったこともある。

雨どいの金具を踏みしめながら7階まで登っていく。正直落ちたら死ねます。

やっとの思いで7階までたどり着いた俺は、彼の部屋の窓に鉢植えを投げつける。

「バリーン！」と大きな音を立てたせいか、近所の「もしもし、警察ですか」という声が複数聞こえてくる。

彼の部屋に入り、スモークグレネード2個、さらに爆竹10連発×10個とスタンガンを頂戴していく。彼はこういう非殺傷武器の

マニアで、何度も自慢されたことがある。

（『貴殿の武器、少量頂戴した。 隆久』 っと）

書置きを残して進入経路と同じところから降りていく。

「じゃあ、進入しますか！」

俺は気合を入れながら久しぶりの実家に顔を襲撃する出すことを決めた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

ここは連堂邸。

都会から若干離れた田舎にその荘厳な家は似合っていないはずだった。

しかし、連堂コーポレーションの社長が住む町ということで見民が増え、それにしたがって町も大きくなっていった。

新幹線の都内への直通便、さらに周辺地域への地下鉄の復興など、現在では都会も顔負けの様相を呈している。

そんな中、横幅1キロメートル、奥行き10キロメートルほどの広大な土地に、ゴルフ場やサッカーグラウンド、野球場にダンスホールなどなど、果ては空港まで完備している連堂邸は違和感がありすぎるくらいにあった。

一般的に解放してあるために人の出入りは激しいが、連堂家の優秀なボディーガードや警備員がきっちりと警備していて、一般人では危害を加えられないほどであった。

そんな連堂邸ではあるが、現在は喧騒に包まれていた。

「隆久様が侵入してきました！」

「信彦様！指示を！」

連堂家当主ならびにその妻は現在、海外で旅行中である。

何年経っても治まる気配のないラブラブっぷりはこの町の住民の間では常識になっているほどだ。

もちろん社交パーティーでも知られており、その秘訣を賜ろうとする者たちが後を絶たない。

話が戻るが、信彦とは隆久の実の兄で、つまり連堂家次期当主でもある。それなりに出来る男ではあるものの、やはり現当主と比べると見劣りしてしまう。

実は彼、隆久の能力を無自覚にも高く評価している。だからこそ自身の地位を脅かすものを遠ざけようとしているのだ。

信彦と隆久。もしも長男と次男が逆であったのなら、とても仲のいい兄弟として育っただろう。

隆久は信彦の機械的ともいえる就寝時間を正確に把握しているため、信彦の眠りの深い時間に強引に押し入ってきたのだ。

執事やメイド、信彦のボディガードに警備員は当主の息子に命令なしで手出しは出来なかったために実質上の家出人の隆久に対しても、離縁されていないためとめることは出来なかった。

そのことを利用して無理やり信彦の部屋に入った隆久は、深く寝入っているのを確認すると爆竹を取り出す。

あわてて止めようとするも間に合わず、「パン！パンパン！パン！」と大音量の爆竹が破裂する。

「な、なんだ!?!」

ようやく起きた信彦が隆久の顔を確認した瞬間、視界が白い色に包まれる。

「隆久！貴様何しに!」

「本格的に家出をしようと思って金を貰いに来たんだよ。兄貴、永遠にさよならだ」

最後に残った爆竹を放り投げてドアを蹴破る。そこでさらにスモークグレネードを足元に転がし、煙にまぎれてボディガードの包囲網から脱出する。もちろん近くにいたやつにはスタンガンを押し当てて眠ってもらった。

馬鹿親父の部屋の前に行き、網膜認証をする。

「認証されました」

「やっぱり、か・・・」

あの時の発言からおおよそ察しが付いていたものの、2年前からここまでの行動が既にバレていたと思うと寒気がしてくる。

「とりあえず、行くか」

部屋に入り記憶の中からあの時の本棚を探す。

「これだな」

見覚えのある本棚から記憶どおりに本を抜き差しすると、本棚が前面に押し出されていく。

横によけて本棚があった場所の床を確認しようとした時、つまづいた。

「あゝ」

そのまま穴に向かって進む。後悔と好奇心とともにその穴に吸い込まれていく。

「ガゴン」という音とともに穴の入り口に仕掛けられた落とし穴に落ちていく隆久。

途中で隆久が見たものは、丸の中に五芒星が描かれた魔法陣のようなものが壁一面に光っている光景だけだった。

その後、信彦とボディガード、執事やメイド達が駆けつけたときには、前面に押し出されたままの本棚と罾が張り巡らされている

穴がぽっかりとあいている以外にはなにも異常は見られなかった。

落ちた先は異世界（前書き）

本作品は独断と偏見により書き進めております

「挨拶」

始めまして、『テスト中の小説集書いてる適当な年齢をとっくに過ぎていたり過ぎていなくなったりするぺらぺらとしゃべってぺたぺたと貼る変な人のようなみかんのようなものようなりんご的なにかだと思わせてジェル状の物体その2』です。

略して『ジェル状の物体2』と呼んでもらえば結構です。

現在は高速執筆していますが、亜衣が登場した時点でもととの構想からかけ離れてしまったことをこの場でお詫びします。

なるべく元の構想どおりに進めていきたいと思いますが、その場で作成しているので途中で矛盾が生じたりしそうですorz

「もともとの構想との大幅な変更点」

- ・ギルド参加年齢が19歳以上から12歳以上に変更
- ・ヒロインは1人から複数人に変更（ハーレムにはなりません）
- ・ルート分岐なしからルート分岐ありに変更（分岐は後半なので決意表明だけ）
- ・学校なしから学校ありに変更（通うかどうかは未定）
- ・その他色々変更点や追加など

最後に、

キャラ崩壊は大目に見てください！（土下座

では小説をお楽しみください、よい旅路を。

落ちた先は異世界

「あああああああああああああ!!!」

こんにちは、連堂れんどう 隆久たかひさです。現在すごいスピードで真っ暗闇をウォーターライダーしています。

かれこれ1時間ほどこの調子なのですが、どこまでこの穴は続くのでしょうか、謎です。

「とうか水の勢いが段々激しくなってきたのはなんでだあああああ!!!!!!!!!ゴプッ!!」

俺は斜め下から垂直に落ちた瞬間に誤って水を飲んでしまい、そのまま気絶した。

.....

「おい、生きてるかー」

ペチペチ

「ふむ」

ん、視界が暗い……。

「お、起きたか。大丈夫か」

俺がぼんやりと目を開けると、そこには軽く手を上げているおっさんがいた。

「よお、こんなとこで何してるんだ？」

金髪でもっふもふの髭を生やしたナイスガイ。若干のツリ目に琥珀色の瞳は穏やかな仕草とは裏腹に、獰猛な印象を与えてくる。歳は40代前半ってところだろうか。

徐々に視線をずらしていくと、鎧を着込んでいる。ガチガチに固めた重鎧ではなく軽鎧のほうだ。

左腰には1mほどの長剣をさしている。銃刀法違反だろ、おい。

「すみません、どこから落ちてきたのですが……ここはどこでしょう」

わざわざ理由を話す必要もないだろう。犯罪者か犯罪者予備軍に身分なんて教えたなら軟禁くらいされそうだ。

体はビショビショ、周囲は……洞窟？ここで逃げ出しても迷いそうだな。

「ここはガディア神国」

「よっ」「よっ」という掛け声とともに立ち上がるおっさん。

「ダンジョン50層の隠し部屋だ」

笑顔でサムズアップ。イケメンの部類に入るおっさんにはとても似合っている。

「あー、俺はエルディオ・ガレシア。で」

ピツとこちらに指を向ける。そのままニコニコと笑みを浮かべるだけだ。

意図を理解した俺は今すぐに何かされるわけではなさそうだと安堵しながら答えた。

「隆久です」

「タカヒサ・レンドー」

笑みを浮かべたまま、苗字まで言われた俺は心臓をつかまれたような感覚に陥った。とっさに距離をとり、心を落ち着けて逃げ道を探る。

敵が何人いるか分からない状態で剣を持つ敵と戦うなんて無謀にも程がある。

「危害を加えるつもりはない。リユージ・レンドーは息災か？」

その言葉に肩の力を抜く。連堂れんどう 流時りゅうじは父方の弟、つまり俺に取っては叔父という立場にある。

確かにどこかから金髪で琥珀色の目を持った彼女を連れてきて「結婚するわ、手続き任せた」って馬鹿親父に言ってきたことがあったような気がする。

その女の人に似ているような……。

「ジュリアさんの親戚ですか？」

「ジュリアは俺の妹だ。知ってるなら話は早い」

ここ外国ですか、そうですか。馬鹿親父のやつ自宅の罫にわざわざ外国に落ちる機能なんてつけなくていいだろ！

「まずここは異世界と呼ばれる場所だ」

「は？」

「この隠し部屋は最後にリユージが帰った場所でもある」

「えーと？」

まずい、この人頭がアレだ。せつかくこんなイケメンなのに異世界なんて妄言を吐くなんて……。

「あー、俺は魔法使えないからどう説明するか」

魔法とかないから、使えないとか当たり前だろ。

「闘技でも見せるか」

何か決心したようなおっさん、改めエルディオは、少しかがむとその姿が一瞬ぶれて目の前から消えた。

「え!？」

「後ろだ、後ろ」

後ろから声がかかる。振り返るとエルディオが立っていた。

「な、人間の動きじゃない……」

ダメだ、これは逃げられなくて正解だったのか……。いや、もう逃げようとは思わないけど。

「よく言われる。言っておくがリユージもできるぞ」

平然と言われるが、叔父さんならやりそうだ。できるといわれたら信じてしまいそうなほどには。

「ここは異世界だとリユージは言っていた。リユージは魔王を倒した後にジュリアと元の世界に帰っていった。いまでも英雄として祭り上げられているぞ。まあ10年前だから当時を知っているものの方が多し」

叔父さん何やってるんですか。

「リユージの家系なら水魔法が得意だろう。ちょっと使ってみてくれ」

いやいやいやいやいや、そんなすぐに使えとか無理ですから!

「あ、この世界の常識がなかったな。とりあえずここを出るか、魔物が襲ってくる前に」

ほどの黒い玉が落ちるみたいだ。完全に倒すまでは血や液体が出てくるが、倒すと同時に砂になっている。

「エルディオさん、あの黒い玉ってなんですか？」

「エディって呼んでくれ。黒い玉は・・・拾ってみる」

「わかったよエディおじさん」

言われたとおりに適当に拾ってみると特に何も起きない。首をかしげながらエディおじさんを見る。

「おじさんはやめる。手に乗せながら『オープン』。やってみる」

「『オープン』」

手に持った黒い玉が白く変わったと思うと、徐々に大きくなってくる。

「それは魔具、だな。初めから面白いものを引き当てる」

「くつくつく」と笑いながら頭に手を置いてくるエディ。重いからやめて欲しい。

やがてある程度大きくなると細長い棒状の何かが手の中に納まっていた。

「これは・・・棍？」

落ちそうになりあわてて握り締めながらその形状を確認する。

長さは2メートル程度で、華美な装飾はない。白いフォルムは神聖な雰囲気をかもし出している。

試しにエディにあたらないように振ってみると、「フォン」と風を切る音が聞こえる。残像が白い尾を引いているようで思わず見とれてしまった。

「大体どんなものは分かっただろう。さっさと突っ切るぞ」

俺とエディは魔物を吹き飛ばしながら外を目指して進んでいった。

竜に乗って(前書き)

本作品は独断と偏見により書き進めております

竜に乗って

光る鉱石によって淡く照らされた洞窟の中、2つの影が走り抜けていく。

2つの影に魔物が飛び掛る。片方の影の拳が当たった瞬間、液体を撒き散らしながら壁へと吹き飛ばされる。

魔物の体が壁に当たり、潰れる。同時に砂となって消えていく。後に残されるものは黒い玉のみ。

もう片方の影が魔物を吹き飛ばした影に話かける。

「ところでエディ、ダンジョンってなんだ？」

先ほどから木彫りの看板にダンジョン××階層とかいう文字がやたらと視界を横切って気になっていたのだ。

「ここは古代の、この大陸が生まれた時代からあるとされている遺跡なんだが、リユージのやつが「ダンジョンだ！」と言ってそのまま『ダンジョン』として定着したんだ、呼びやすくっていいだろう？」

なるほど、流時叔父さんの影響力はすごいな。

「ああ、タカヒサはしばらく姓を隠しておけ。騒がれたいなら関係ないが、公表すると色々面倒なことになるからな」

「はい、元々隠すつもりだったんで構いませんよ」

面倒ごとはごめんだとつぶやく。そういえば普通に会話が通じるんだが、なにか魔法とやらがかかっているのか？

「はい、質問」

「どうぞ、タカヒサ少年」

「言葉が通じるんですが、なぜでしょうか？」

「リユージが広めた日本語が共通言語だからな。故郷の言葉なんだから？っは！」

隙を突いて攻撃をしたのであろう魔物がまたも飛ばされて壁に当たり、潰れては砂となる。

衝撃の新事実発覚！あれ、リユージさんが広めたってことはリユージさんは言葉通じなかったんじゃ……。

いや、アマゾンの奥地から原住民とお友達になって帰ってくる規格外な人間だ、気にしないことにしよう。

「タカヒサは戦わないのか？っだ！」

相も変わらず吹っ飛ばす魔物、この人もこの方面は規格外だ。

「魔物を素手で吹っ飛ばす規格外なエディさんと一緒に戦ったら心がへし折れそうなんで嫌ですよ」

「それはスマン。1人で戦いたかったか……」

俺の言葉を聞くなりすぐに拳をしまうエディさん。

向かってきた魔物の攻撃を棍で受けて、流す。勢いのまま背後の壁に激突すると「ゴブア」と情けない声を上げる。砂になっていないところを見ると倒せてはいないようだ。

「それはそれで危険なんで拒否します。腰の剣は飾りですか？」

「職業上、武器がないとなめられるからな。仕方なくさしているだけだ、よっつと」

再び吹き飛んでいく魔物。一騎当千、いやチートではないだろうか。どちらにせよ意味は同じか。

- - -
- - -
- - -

そんなこんなで走っていると遠くに日の光が見えてきた。やっと地上に出られる。

魔物も下の階層より弱いのか、他の人影をちらほらと10人ほど見かける。それでも見る限り俺よりも数段格上の実力を持っているのだ。

エディの戦い方に全員が振り返って驚いて剣をあらぬ方向に振り回したり魔物の攻撃で突き飛ばされたりしているが、前者は気づいた瞬間に軌道を変えて攻撃を当てているし、後者はしっかりと防御と受身を取っている。

しばらくして出口付近に到着すると、岩の陰に隠れた場所で手招きしてくるエディ。なんだろう。

「タカヒサ、ちょっとこっちに来い」

俺は呼ばれるままにエディのそばに行く。すると、突然だきついてきて俺の姿をマントで隠す。

「え、ちょ……俺そっちの趣味はないんですが!？」

「黙れ、出るときに面倒なことになるからな。隠しておくに限る」
そういわれると納得するしかないため、結局抱かれたままマントにくるまれる。

ガツシリとした手がすこし痛いくらいに抱きしめてくるが、本当にそっちの趣味はないんだからな!

背はエディの方が圧倒的に高くマントごとかき抱かれた俺は宙に浮かぶ。

足が付かないことに不安を感じるが、マントから足が4本生えていたらそれは間違いなく人間じゃないため我慢する。

「うす!寒い中の見張り、ご苦労さん」

「あ、エルディオさんお疲れ様です。人が少ししか来ないのに見張りを立てるなんていじめ以外の何ものでもないですよね」

嘆息しながら答えを返す兵士と思われる人物。

「じゃあ、急いで帰らないと娘が心配するのでは」

「引き止めてすみません。一度は龍に乗せてくださいね？」

「ああ、考えておく」

やっと歩き出すエディ。俺は無事に抜けられたことに安堵しながらも気になる点を聞くこととした。

「（誰も居ない？）」

「（いないが待ってくれ、誰も来ない場所に行ってから解放する）」

「（わかった、どのくらいかかる）」

「（あと5分くらいだ、我慢できるか？）」

「（大丈夫）」

気になった点は後で聞くとして数分ほど我慢する。腕で抱かれた手の当たりが痛い。それはもう滅茶苦茶痛い。

数分後、ようやく腕から解放された俺は腕をさすりながら辺りを見回す。壁に囲まれているのか、少し暗い。

壁は太陽の光を浴びて、緑色の鱗を輝かせている。ん、鱗？

「え？」

上のほうへ視線を向けると、蛇がいた。舌をシュルシュルと出し入れして上を向いている。本能的な恐怖を感じた俺はエディの背後に隠れながら叫ぶ。

「ちょ！エディおじさん！？あれなんですか！？」

「おじさんはやめろ！」

拳骨が落ちた。酷い頭痛に悩まされながらも、パニック状態から落ち着いた俺は現状の把握に努めてみる。

「本当にあれなんですか？本能的な危険をものすごく感じるんですが」

蛇を指差しながらたずねる。蛇の目がギョロリとこちらを向いて「ヒィ！」と情けない声を上げてしまふ。ふと頭に重さを感じて顔を上げるとエディの笑顔が待っていた。

「安心しろ、俺の妻で竜のレミリィ・ガレシアだ。レミィ！周りに人はいないか！？」

「シャーー！」

「よし、人型になってくれ。タカヒサ、この子の名前なんだが、怖がっている」

どう見ても竜じゃなくて蛇なんですけど突っ込んだら負けなんですねそうなんですか！

混乱しているうちに竜(?)から人に変わったレミリィさん。

腰まで垂れて後ろでひとまとめにしてある緑の髪にエメラルドグリーン
の瞳、白い肌に白いワンピースを着た20代前半と見られる
美人な女の人だ。

「始めまして、竜のレミリィ・ガレシアです。夫がお世話になった
ようで」

流れるような仕草で礼をすると、となりのエディが胸元を見つめ
てニヤニヤしていた。変態だ、変態がいる。

「始めまして、隆久です。お世話になったのはこちらのほうです」

向こうの世界で習った礼儀作法にのっとり腰を曲げる。

「タカヒサさん、これから行くあてはありますか？」

そういえばそうだった。すっかり流されていたがこっちで寝ると
ころがない。

「ないのならうちいらっしやってはどうぞでしょうか？エディもそ
のつもりですよですし」

あんな魔物がいる世界でこのまま生きていく自信はない。かとい
って街中で仕事を探そうにも素性の知れない者を雇ってくれるかど
うか……。雇ってくれたとしても絶対まともじゃないからなあ。

「はい、それではお願いします。いまのままでは野垂れ死にそう
なので」

断る理由も見つからず、申し出を受けることにした。

「後で色々と説明しますから、怖がらないで私に乗ってくださいね」
言うなり、レミリイさんの体が光を放つ。瞬く間に竜の姿になった。

ドラゴンではなく日本の竜のような姿。長さは50メートルには届かないくらいで、背には鬣たてがみが生えている。足が4本生えていて、よく見ると尻尾は尾ひれのようになっている。顔は蛇のままだったが。

「タカヒサ、鬣をしっかりと掴んでおけよ」

エディは、俺を横抱きにして竜に飛び乗る。鬣を掴ませると抱き込みながら俺の前の鬣を掴む。

「レミイ！」

名前を呼ぶと竜が飛び立つ。強力なGが俺の体を軋ませる。

しばらく耐えていると、雲の上に浮上する。上から見下ろす雲はもふもふとしている。まるでわたあめのようだ。

左右に体を振られながらしっかりと鬣を掴んでいる。体制が崩れると即座にエディのフォローが入る。

ようやく重心の取り方に慣れてきた頃には高度が下がって街が見えてきていた。

「タカヒサ、あそこが俺達の家があるソロノア連邦の都市の一角、ガレシアだ」

城壁に囲まれた中に街がある。一軒一軒の大きさが、日本の一軒家の2倍くらいある。その中でも大きいものは何かの重要な施設だろうとあたりをつける

街中に竜が下りていって怖がらないのかと不安になるが、あの兵士の様子から考えるに何度もこういうことがあったのだろうと自己完結しておく。

街の上空近辺で、円を描いてゆっくりと降下するレミリイさん。街を一望できるいい機会だと頭の中に地図を作っていく。

円状になっている壁に、正反対の位置にある2つの出入口。門番らしき人影があるため、検問でもしているのだろう。

中心から4方向に大通りが伸びていて、2つは先ほどの門、もう2つはその線から垂直に伸びている。

中心の角の位置には学校らしきもの1つと大きな建物が3つ、そのうちの1つの建物の屋上にレミリイさんは向かう。

エディが俺を横抱きにして飛び降りる。20メートルはあったのに予想していた衝撃がほとんどない。

俺を放すとエディは上空を見上げる。そこには竜の姿は既になく、レミリイさんが笑顔で両手を広げて降ってきた。

ガツシリと受け止めたエディに初めて男としての尊敬の念を抱い

た瞬間だった。

我が家（前書き）

本作品は独断と偏見により書き進めております

我が家

2人はひとしきりイチャイチャとキスしたりお互いの手を取り合ったり額をあわせてなにやら囁きあった後、雰囲気が変わる。

さきほどまでの甘ったるい空気と違い、ピンと張り詰めたような空気。茶化しは許されない。

2人は俺を連れ立って建物の中に入る。外から見た限り、3階建ての建物だ。

3階には人が1人もいないように静まり返っている。4つほどのドアがあり、中を見るまでもなく進んでいく。

階段を下りて2階につくと、そこは広い談話室のようになって、20人近くの武装した人間たちがたむろしていた。

彼らは2人の姿を確認すると、急に立ち上がり敬礼した。

「マスター！お帰りなさいませ！」「」

全員が声をそろえていうさまは圧巻と言えるだろう。俺は迫力に気おされて後ずさりする。

「ただいま戻った。メリエルはどこにいる？」

「はっ！ここに」

エディの重苦しい声音に1人が答えて人垣が割れる。中から金髪

でエメラルドグリーンの目をした少女が現れる。

メリエルと呼ばれた少女はその場にいた人間たちの腰の高さほどで、とても可愛らしい。メリエルは突然の空気に戸惑っているのかおろおろとしている。

数秒ほどの時間がたった時、メリエルはこちらの姿に気づいたのか、とととと走りよってくる。

「お父様、お母様、お帰りなさい」

愛くるしい笑顔で首を傾けながら走ってくる様に周りの人間たちは見惚れているようだ。

「メリエル！」

エデイがしゃがんで手を伸ばす。そのまま飛び込めば温かい家族の光景になっただろう、しかし。

「お母様〜」

しゃがみこんだエデイを見事なスルースキルで流してレミリイさんに抱きつくメリエル。

レミリイさんはメリエルを抱き上げて頭を撫でながら何事か囁いている。その横でしゃがみこんだまま泣き崩れているエデイ。

そんなエデイの肩を叩きながら慰めの言葉をかける周りの人たち。置いていかれている隆久は呆然とフリーズしていた。

「メリエル・・・なぜ飛び込んでこないんだ・・・」

「お父様はゴツゴツしてるから嫌いやっ!」

さらに追い討ちをかけるメリエルに絶望の表情を浮かべるエディ、子供ゆえの残酷さにひどい心の傷を負ったようだ。

いつの間にか張り詰めていた空気は消えていた。ようやく動き出した隆久は少しの緊張と多大な焦りによりテンパっていたが、状況の把握に動き出していた。

「彼女とこの武装した危ない人たちのご関係は？」

真っ白に燃え尽きて今にも吹き飛びそうなエディは役に立たないのでレミリイさんに聞いてみる。

「この子は私達の娘で、竜のメリエル。武装した人たちは冒険者で、エディが『メリエルの守護及び遊び相手』の依頼を張り出したみたい」

依頼でやっていたのか。彼らの様子からはとてもそうは見えないけど。

「4人までの女性限定のDランク依頼だったのだけど、どうしてこうなったのかしら」

俺の疑問の声を待たずにレミリイさんは答えてくれる。顔に出ているのだろうか？

ふとエディのほうを見るとようやく復活したようだ。

「お前ら、よくやってくれた。だが男も居るとはどういうことだ？」

鋭い目つきで男の冒険者を見渡す。確かに半数ほどは男で構成されていた。

「我々『メリエル様親衛隊』はメリエル様をいつまでも守る存在であります！我々の規律は触れずに護り愛でる事！一切メリエル様には触れていません」「」

「噂の『メリエル様親衛隊』か。よくやってくれた。これからも頼む」

エディは彼らと固く握手を交わしてメリエルの可愛さについて語り合っている。

噂の、がどの程度の噂なのか怖くて聞けないものの、エディのあの迫力を相手にして堂々と言いつけるのだから触れてすらいないだろう。

心配する気持ちはとてもわかる。ロリコン趣味のない俺から見ても十分に可愛い。

.....

事態が落ち着くまで2時間をようした。

30分ほどして眠くなったメリエルがレミリイさんと部屋を出て

行ったことで『メリエル様親衛隊』の勘と父親の嗅覚でメリエルがいなくなったことを察してパニックになったり、俺が説明して落ち着くまでに数分を要したり、俺にメリエルの可愛さについて懇々と熱弁してきたりといういろいろなことがあった。

エデイさんがようやく解放してくれた時にはもう日が落ちていて、夕食の時間となりレミリイさんがメリエルと共に食事に呼びにくるところだった。

食事はこの場所の3階でとった。豪華でも質素でもないが、とても家庭的な見た目、味だった。

家族での食事というイメージで、友人やボディーガード達との食事より温かみがあった。もちろん友人やボディーガード達との食事は面白みでは勝っていたが。

この温かさの中で育つのならメリエルも捻くれたりはしないのだろうと少量の羨ましさと共に家族の食事を見ていた。

1階が依頼斡旋・冒険者登録・素材の買取など、冒険者ギルドというイメージを表したようだった。もちろんメリエルのために冒険者用の酒場は通りの向かい側に移転したらしい。

2階はご存知の通り談話室となっていて、軽食やお菓子や飲み物が用意されている。汗を流すためのシャワールーム（有料）などもある。

3階はエデイ・レミリイ・メリエルの寝室や職場、生活の場であり4つの部屋に分かれていた。登ってきてすぐの右の部屋に夫婦の寝室、左にギルドマスターの執務室。奥の右の部屋が将来のメリエ

ルの部屋で、左がダイニングルームだ。メリエルは今年の誕生日で12歳になり、そろそろ部屋を与える年頃なのだがエディが渋っているらしい。

「それで俺はどこで寝ればいいのでしょうか」

2階に備え付けられたシャワールームから戻ってきたエディに質問を投げかけてみる。

「メリエルの部屋は使わせないぞ」

迫力の視線と共に脅しをかけてくる。それを理解しているから聞いているんだが。

「だろっからどこで寝るのか聞いたんですよ」

俺は顔に手を当てて嘆息する。この娘命の親ばかりを止めてくれ。

「執務室に折りたたみのベッドがあるはずだ。それを使え」

少々考えたエディは思い出したように執務室を勧めてくる。もちろん反対はしないが。

「了解です」

それを聞きつけたのか、レミリイさんがメリエルをつれて俺の方に来ると、シーツと温かそうな毛布を渡してくれた。

「ではおやすみなさい」

「ああ、ゆっくり休めよ」

「おやすみなさい、よい夢を」

「ふう？おやすみなさあ・・・」

律儀にもおやすみと返してくれた。こっちにもそういう文化があるのか。そしてメリエル可愛い、ロリコンじゃないぞ！洗脳されただけだ！

俺は多量の感謝を込めながら頭を下げると執務室に入り、意外と整えられていることにびっくりする。執務室と聞いて書類でごちゃごちゃとされていると思っていたのだ。

右奥に折りたたんで収納されているベッドを発見し、引き出してみる。シーツははがされていてきちんと清掃もされているようだ。しかし！

シーツをセットして毛布をかけてさあ寝るぞ！という時に少量の匂いが鼻腔をくすぐる。

何の匂いか気になって吸い込んでみる。エディの汗のにおいと女の人の汗のにおい。頭に浮かんだのは不味い想像。

すぐに頭から追い出して無理やり眠る。羊が285匹になった頃に眠気が襲ってきたため、抗わずに身を任せた。

夢の中で話すこと（前書き）

本作品は独断と偏見により書き進めております

夢の中で話すこと

ふわふわと、ふわふわと漂う体。

存在があやふやで、意識もあやふやで。

そんな中で声が聞こえてくる。

「……い……る」

「お……お……」

「お……い……き……」

「おーい、起きろ」

ゆっくりと脳が覚醒して目の前の光景を映し出す。

黒い髪に黒い瞳、心配そうな顔をした流時叔父さんがうつすらと光りながらそこにいた。

「流時叔父さん。お久しぶりです」

久しぶりの再開にもかかわらず態度を変えずに挨拶する俺。だつて流時さんだし。

「久しぶりだな、そっちの世界はどうだ？」

「そっちの世界って……どこどこですか？」

完全に脳が覚醒して当たりが暗い闇に包まれていることに気づく。よく見ると俺の体もうすい光りを放っていた。

暗い闇に包まれているのに不思議と恐怖感を抱かない。温かい暗さでも表現するといいのだろうか。

「夢の中、だな。具体的に言うと僕の夢に隆久を連れてきた」

そういわれても特に疑問を抱かない。なぜかって？だって流時さんだし。

「実はなあ、あれ発動させるの10年ごとに1回だからあと10年は戻ってこれないんだよ」

「は？」

気まずそうに言う流時さんの言葉は俺の頭が正しく翻訳してくれていないようだ。

いや、落ち着け。流時さんはこんな時に冗談を言う人じゃない。

いや、・・・10年戻れないってどういうことさ！あれ仕掛けたの流時さんだったのか！

「簡潔に言うとあと10年はそこから戻れない。ついでにそっちで彼女でも見つけてつれて来い」

「えっと・・・まあわかりましたけど、他の方法で戻れないんですか？」

仕方ないか、どうせ身を隠して逃げるつもりだったし。こっちに
いる間に信彦が跡を継ぐだろ。

彼女云々は出会い次第かな……。そういえば亜衣はどうしたん
だろつ。

「隆久の魔力と僕の魔力を引き合わせれば1年に1度だけ物を送る
ことは出来るかも。だけど人間を運べるのは魔力がこちら地球の世界に
通じやすい日だけなんだよね。圧倒的に魔力が足りない」

つまり10年に1度だけそちら地球の世界とこちらエルガディアの世界の位置が近
づく、という感じが。

「ちなみに夢でならいつでも会えるから。睡眠状態の精神はこちら
もそちらもほぼ同じ位置にあるらしいよ。それでも双方ともかなり
魔力が無いと会えないけど」

さびしそうに笑う流時さん。おそらくはエディさんや他の仲間の
ことを言っているのだろつ。

「エディさんは元気ですよ。毎年、流時さんのいなくなった日にダ
ンジョンの隠し部屋に行っていたみたいですよ」

これはメリエル自慢の時に「メリエルの可愛らしさを毎年報告に
行ってたんだぜ」と言っていたから確定だろ。

「そっか」と苦笑いを浮かべる。悲しそうな表情をするが、それ
も一瞬だけのこと。

「そついえばロリコン君にはあつた？」

「え？」

あれ、いま変な単語を聴いた気がする。幻聴だと信じたい。

「その様子だとまだかな、エディだけでも会えたならよしとしよう。また準備が出来たら呼ぶから、またね」

「あ、はい。そっちの学校の方はどうなってるか分かりますか？」

ダメもとで聞いてみる。知らない可能性が高い。

「亜衣さんはショックで休んでるみたいだね。復活するのにもうちよつと時間かかると思う。学校には信彦くんが罰として代わりに通うことになったよ、いわゆる替え玉作戦だね。義姉さんは爆笑してみたい。兄さんは前から予想はしてたみたいで、根回しはもうすんでたよ。僕も知ったのは兄さんに聞いてからだし。異世界に行つたことを知っているのは兄さん、義姉さん、僕、ジュリアだけかな、亜衣さんと信彦くんにももしかしたら教えるかもしれない」

なるほど。亜衣は少し心配だけど大丈夫かな。

「それじゃあ、僕はこれで失礼するよ。魔力通信は切るけど、しばらくしたらまた夢の中に呼ぶからその時に説明するね。いまはちょっと時間がないんだ、じゃあまた！」

急いでいる時に一方的に喋って帰る癖は相変わらずだな、と流時さんのまねをして苦笑した。父親似の俺には似合わないかもしれない。

馬鹿親父、いつも張り合っただけで敬意はしてたんだ。どうも兄貴に跡をつがせる気がないようだったし、今回のことも都合が良かったと解釈しておくのが無難だろう。出来上がった会社をいつでも面白くないじゃないか。それに多分・・・いや、これは誰も気づいてないだろうし言わない方がいいだろう。馬鹿親父の驚く顔も見てみたいし、な。

一部ニヤニヤと笑いながらも、ひとしきりお別れの言葉を送って心を切り替える。永遠の別れではないものしばらく会えないだろうし、引きずっても仕方が無い。

昨日の『メリエル！最愛の娘』談義で聞いた話だが、メリエルはレミイさん エレ魔獣と純人間のハーフ、つまり亜人間らしい。背中が鱗に覆われていると言っていた。

亜人間や魔獣は魔人間にもものすごく嫌われていて、冒険者の間は比較的ではあるが理解があるもののガディア神国では迫害の対象だとか。ダンジョンに連れて行かなかったのもそのせいだと言っていた。

他の国の魔人間にも嫌われてはいるが、ガディア神国は拉致・監禁・陵辱・暴力・奴隷化・殺害・売買のすべてが許されていて、横行しているようだ。

また例外はあり、純人間・魔人間の奴隷・使い魔（魔獣のみ）の場合は手出ししてはいけないという規律がある。破った場合は奴隷・使い魔の『隷属跡』と呼ばれる印から致死性の電流が放たれる上に運良く生き残っても主人が自由に処罰を出来るそうだ。

『隷属跡』とは奴隷や使い魔につけられる魔法陣の一種で、首の後ろに刻まれる魔法陣だ。刻まれた者の魔力を吸い取り常時起動させる。純人間・亜人間の魔力を持たない者には効果がないらしい。

奴隷は殺し・自殺以外の命令に従わない場合に全身に激しい痺れと痛みを与える。

使い魔は自殺以外の命令に従わない場合は、その……体中が敏感になるとか……。

流時さんも奴隷制度は廃止させようと動いたらしい。殺しの禁止とガディア神国以外での奴隷化・売買の禁止をさせるところまでしか出来なかったとか。そこまですれば純粹にすごいとおもう。

話が逸れてしまった。昨日の『メリエル！最愛の娘』談義の最後にこちらの常識をまとめた資料を渡してくれると言っていたし、少し楽しみだ。活字を読むのはこれで結構好きなんだよね。

夢の中で話すこと（後書き）

11月4日集計（1日）

PV999、ユニーク204

1000に届かず！珍しいので乗せてみました。

家族のち訓練（前書き）

本作品は独断と偏見により書き進めております

家族のち訓練

朝になり、朝食に呼びに来たレミリイさんに連れられてダイニングルームへと歩く。

レミリイさんと手をつないで眠そうにしたメリエルも一緒だ。ぶにぶにした小さい手の甲で目をこすっている姿はとても可愛い。

ダイニングルームで顔を洗う。水は魔法でくみ上げているらしい。このくみ上げる水道は半永久魔法陣という叔父さんの残した水道だ。ギルド内部の水道はすべてこの魔法陣が組み込まれているらしい。

半永久魔法陣というのは魔力を蓄積し必要時に発動させる魔法陣で、流時叔父さん以外は発動できないらしい。

なんとなく見てみたら七芒星でうっすらと文字が浮かび上がってきた。解読は出来なかったけど。

仕方なく諦めて顔を洗って席に着く。この世界にも上座とかあるのだろうか。

テーブルの上を見ると塩で焼かれたらしい焼き魚が、おわんに入った白い汁が1人ずつに配られていて、大きな皿にみずみずしい緑色のサラダがおいてあった。昨日と今日見たただけだが、色は日本とそう変わらないらしい。

レミリイさんが木製のおひつらしきものを運んでくる。中を開けると白い白米が！白米が！白米が！

「おおっ！」

思わず身を乗り出してしまう。エディとレミリィさんはほほえましく笑っている。メリエルは俺の声でようやく覚醒したようだ。

「リユージが好きだったからな。これは魔の森でしか育たない米というものだ。繋がりを絶ちたくなくて、な……。未練がましくずっと育てていた」

エディさんは悲しそうに目を伏せる。俺は昨日のことを思い出しながら告げた。

「そういえば流時叔父さんと連絡が取れましたよ。どうやら俺しか連絡が取れないようですが、エディさんの話をしたらとても嬉しくうでした」

「な、リユージと連絡が取れたのか!？」

「はい、残念ながら俺と流時叔父さんしか連絡が取れないみたいです。証拠としてロリコンって誰でしょう?まだ出会ってないようですが」

意気消沈したエディさんを見て自然な流れで話題を逸らす。

ロリコンという単語でピクツ!と吊りあがった眉が上下に揺れている。

「あのロリコンか、あいつはいま遠い場所にて会えん。かといってメリエルに会わせたい訳ではないがな!」

どうやらロリコンは人物名のような。いや、予想通りだが。確かにメリエルはロリコンの対象範囲に入るだろう。

メリエルは名前を呼ばれて「はい、お父様？」と首をかしげて見上げてくる。エディさんが悶えているうちにレミリイさんがご飯をよそい終わった

こちらで日本食を味わえるとは思わなかった。白い汁も味噌汁だったようだ。これも流時叔父さんが・・・どれだけなにを広めているんだ・・・。

「隆久という名前は珍しいんですか？」

「そうだが、この世界では苗字がないほうが珍しい。だから苗字はガレシアを使え。タカヒサは今日からうちの家族だ。手続きも済ませてきた」

「え・・・は・・・ええ!？」

早いし!いきなり家族って・・・さすがリユージ叔父さんの友人だ。やることなすこととっぴ過ぎる。

「まあ、分かりました。今日からタカヒサ・ガレシアと名乗ります」

「それがいい。基礎知識を叩き込んだ後は訓練してやる、生きていく力を蓄える」

なし崩しに家族となってしまうた俺はその日から訓練三昧の日々を送る。そのことをこの時の俺は知る由もなかった。

する。

登録は1人で何人分でも登録できる上に、虚偽の記載をしてもいいらしい。血液を金属のカードについた魔法陣にしみこませて作るため、よく調べれば同一人物だと分かるらしい。

タカヒサ・ガレシアとファルコンの二つを登録しておく。受付はエディさんがやってくれたのですこし嘘を試してみる。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

【タカヒサ・ガレシア】

年齢・17歳 誕生日・春1月の20日（現実換算3月20日）

登録日・2042年夏1月の4日（現実換算6月3日） 登録
場所・ガレシア

依頼達成数・0件 特殊任務達成数・0件 R/G P O

- - - - -
- - - - -
- - - - -

【ファルコン】

年齢・21歳 誕生日・夏1月の4日（現実換算6月3日）

登録日・2043年夏の3月の21日（現実換算8月21日）
登録場所・ガレシア

依頼達成数・0件 特殊任務達成数・0件 R/G P O

- - - - -

.....

各カードにはそのように記載されていた。

エディが言うには徐々に依頼をこなして行って、初めのうちはモンスターとの戦いはさせないらしい。

依頼にはエディが付いていき、知識がきちんと備えられているかどうかを判断する。

その間、ずっと厳しい訓練をこなして、メリエルと共に学校に行く。メリエルの保護者役とも言つ。

今日からさっそく訓練をするらしい、メリエルも一緒だ。

家族のち訓練（後書き）

11月6日

充電器の代わりとなるUSBケーブルを発見。お騒がせしました！

訓練、訓練、また訓練（前書き）

本作品は独断と偏見により書き進めております

訓練、訓練、また訓練

ギルド登録を終えた俺達は訓練のためギルドの屋上へ来た。

母^{レミイ}さんが隠蔽魔法を使い、外部からの認識をシャットアウトする。

メリエルは以前から軽い素振りや魔術の訓練をしてきたらしく、剣を振りながら初級攻撃魔法をつかっているのが様になっている。

エディはメリエルに剣を持たせ、エディ自身は木剣を持つ。

「メリエル、今日はお父さんと一緒に試合形式で打ち合いをする。体に1発でも当てられたら好きなことを1つだけかなえてやるっ」

「ほんとっ!?!? よーし!」

メリエルは開始の合図も聞かないままエディに接近する。

単純な接近だが、近づいても剣は振らない。かまえたエディは意外な攻撃に驚きつつ左手で横薙ぎに剣を振る。

メリエルは走ったまま抜刀し、剣の腹で攻撃を受け止めて踏み込む。とつさにエディが後退するとメリエルは先ほどの倍近い速さで懐に潜り込み、上段から振り下ろす。

エディはそれを半身になり避けると、突く。メリエルは勢いのまま前転してかわす。

「さて、タカもやるわよ」

そこで母さんレミリアから声がかかり、視線を戻す。

数日の間に、それなりに親睦を深め合ったためか、レミリアさんに「母さん」と半ば強引に呼ぶように命令されて呼んでいる。ちなみにエディは「父さん」とは呼ばせなかった。

逆に、いつのまにか俺のことを両親は俺の許可無くタカと呼ぶようになっていた。

「わかった」

「まず、魔法陣の芒星は知ってるわね？まず魔法は魔法陣に魔力を通さなきゃ魔法は発動しないの。魔法陣の芒星の数が多いほど使用する魔力も大きくなっていくの。昨日寝てる間に調べてみたんだけど、タカは私達竜種と同じくらいの魔力があつたわね」

竜種は人間よりはるかに魔力が高い。魔法が得意な種族には劣るけど……。

「魔力は一生伸びるから、もしかしたら七芒星の魔法も使えるようになるかもしれないわね」

ひとさし指を立ててにつこりと笑って、ウインク。

七芒星といえば水道の魔法！なんともすばらしい！

「まずは得意な属性の魔術を調べてみましょう。一度習得すれば簡単だから」

そんなことを言いながら5枚の紙を取り出す。それぞれ火・水・土・風・雷の属性が書いてある紙だ。

この5つの属性は基本的に魔力を持ってさえいれば必ず使える属性だそうだ。

「これに触れながら、体の違和感をこの紙に流し込むの」

俺は言われたとおりに違和感を探すが、どこにも無い。仕方ないのでいつもの集中の仕方を試してみる。

目を閉じてイメージで手に力を集める。集めた先が熱くなり、それを指の先に流し込む。

「できてるわ！どんどんやって頂戴！」

俺はどんどん熱を流し込んでいく。この実験は紙が焦げる・濡れる・腐敗する・切り刻まれる・静電気が溜まる速度を量って適正を見るものである、らしい。

俺の属性能力は雷と水が特別に高かったらしい。そのあとにちょっとだけ風、土、火の能力があったとか。

基本的なこの5属性は得意な能力と不得意な能力があり、それぞれ補正がかかる仕組みだ。

このほかの属性は、才能の問題であり種類も多いためにしらべるのにも一苦労らしいので、今回は諦めることにした。

「雷属性と水属性、どっちの魔法がいい？」

息抜き・前編（前書き）

本作品は独断と偏見により書き進めております

息抜き・前編

訓練もそれなりに進んできたある日、メリエルの誕生日が近づいてきたことに気づいた俺は、メリエルの誕生日プレゼントを買いたいとエディに相談してみることにした。

相談を持ちかけるとエディはメリエルの反応をみて決めればいいと言い、家族総出で露天へと繰り出すこととなった。

「エディ……ここ進むのか？」

東通りの状況を見ながらも右隣に立っているエディに話かける。

俺は迷子にならないようにと渡された地図を右手に持ち、左手をメリエルとつないで呆然とつつ立っている。

> i 3 4 4 6 6 — 4 2 9 2 <

目の前には大変賑わっているようになによりな露天。

オークション形式で落札される声が響く。それを見守る野次馬達はつきり言つと邪魔。

「これ、はぐれると思うんだけど」

人込みがすごい。この中に入ったらメリエルや俺は瞬間的にあらぬ方向へ行ってしまうだろう。

「そついえば今日は商人が来ていたな。新商品が入荷したとか言っ

ていたようなきがしないでもない」

胸を張って言うことじゃないし、そこは覚えとこうよ！新商品、少し見てみたいがこの人込みに飛び込む勇氣はない。

「先に服屋へ行こう、エディ」

メリエルが不安げな表情をしていたので、地図をしまつてあいた右手で頭を撫でてやる。

すこし身をよじりながらも逃げ出さないの、思う存分撫で続ける。恨みがましい視線を感じるが無視無視。

「その手を離せ！そこに触っていいのは俺だけだ！さつさと服屋に行くぞ」

ガバアツとメリエルに覆いかぶさると、こちらを睨みつけて威嚇してくる。

その目に怯みながらも目を逸らさずに睨み返す。そのまま数十秒睨みあっていると邪魔が入った。

突然エディの顔の前に出現した母さんが手を振った瞬間、エディの体が崩れ落ちた。

目を丸くして驚きつつもよく見ると、その口の中には虹色に染まった粘体生物がうねっている。母さんやばい！！鬼だ！

その粘体生物はスライム、その中でも絶望的な味を持つ【スライム・レインボウ】という種だ。

へと向かうことにした。

2メートル近いおっさんが引きずられて大通りを進む。それがエディだと気づくと、爆笑するもの半分、驚くもの半分、そして少量の哀れみの視線がエディと俺達を貫いていく。

結局、エディは母さんとメリエルのファッションショーが終わる頃に気を取り戻して、ファッションショーを見られなかったことで再度『動かないエディ』状態になってしまったので路上放置して宿屋に向かった。

- - -
- - -
- - -

この街には食堂が宿屋と兼業しているらしい。

宿屋へと向かった俺達はカウンターにいる愛想のいい『お姉さん』に食事だけという旨を告げ、食堂へと向かう。

テーブルにつき注文をとろうとすると、外から腹に響く音が聞こえてくる

「・・・え・・・い・・・え・・・う・・・
メエ〜リイ〜エエ〜ルウ
〜〜〜!」

「ズドドドドドド、バーン!」とくぐもった音から喧しい音へと変わる。その音に負けないほどのエディの叫び声は近所迷惑である。

案の定全員から非難の視線を向けられたエディは、ばつの悪い顔

をしながらこちらに近づいてきた。

「（なぜ俺を置いていったんだ！）」

エデイが俺に囁いてくる。小声であるところを見ると常識はわきまえているようだ。

「だって父さんが動かないから」

ニコツと満面の笑顔を貼り付けながら毒を吐く。エデイが「うつ」と詰まるなりさらに言葉を畳み掛ける。

「大体さ、この間メリエルに攻撃を当てられたからって八つ当たりで俺の意識が朦朧とするまで訓練という名のイジメをする父さんに何を遠慮する必要があるのかな？それにメリエルが好きだからっていちいち暑苦しくかまってるからメリエルに引かれるんだよ？（しかも母さんをないがしろにしてるせいで母さんの訓練まで厳しいし本当にどうにかしてよ。父さんそのうち刺されるんじゃない？）第一、その言動のせいで他の人たちから奇異の目で見られるこつちの身にもなってほしいよ」

一気に言い切り最後にため息をつくとき、俺は注文にきた『お姉さん』にスパゲティらしきものとスープ、サラダを2人分頼む。

メリエルと母さんもそれぞれ注文をすると、虚ろな目をしたエデイをスルーして厨房へと消えた。

復活する見込みの無いエデイを放っておいて食事を取る。一家団欒を大黒柱なしで行う偉業を成し遂げた後でエデイを見る。

デイの頭に乗っているため、見上げる形になる。

エディとメリエルの意見を合わせた結果、肩車といういかにも『親子』な形として楽しんでいるようだ。

肩車をすることが決定して、ワンピースから服屋で買ったフードつきのパーカーに短パンという衣装に身を包んだメリエルはどこからどう見ても美少女だ。

エディは男の子に見えるように買い揃えたようだが、どう考えても可愛らしい美少女にしか見えない。

ちなみに俺は母さんとエディに挟まれていて、少し恥ずかしい。先ほどとは打って変わって生暖かい視線がガレシア一家に注がれる。

暖かい雰囲気を保ったまま俺達は人込みにまぎれていった。

息抜き・前編（後書き）

休みの日というのを書こう！と張り切ったはいいものの、いざ書くとなると難しいですね。

息抜き・後編（前書き）

本作品は独断と偏見により書き進めております

息抜き・後編

市場には果物や野菜、魚や魔獣の肉などの食品類。

露天には生活雑貨やアクセサリ、骨董品などの物品。

それぞれ住み分けながら出店しているようだ。

そんな中でも目を見張ったのは小さな人形だった。

職人の腕がよく分かるくらいの細部まで施された塗り。徹底された削り。中でも目を見張るのは漆黒の瞳。

それは深く深く吸い込まれるような瞳で、それでいて気を失っていない。

「おじさん、これいくらですか？」

思わず手が出てしまうのも仕方の無いことだろう。

「お兄ちゃん、これ買うの？」

震えながらしがみついてくるメリエル。ごめん、俺は直感だけは信じているんだ。

怖がっているメリエルをエディに預けて先に行かせる。

「おう、不気味で誰にも売れなくてな。いまなら別のモン買ってくれりゃただで譲ってやるぜ」

頭に乗っているメリエルは目立つ。その容貌とあいまって存在感はさらに引き立てられている。

後姿を追っていくとそこには確かな『家族』の形があつて、俺は声をかけるのを躊躇してしまふ。

さっきはメリエルの今後のためにもエディにきつく言ったが、俺の予想通りならきつと今後の分までメリエルを可愛がっているのだらう。

そんな家族を邪魔しないために、ゆっくりと気づかれないようについていく。

なぜなら12歳のメリエルと17歳の俺が一緒に通える学校なんて大陸に一つしかないのだから。

ふと意識を戻すと、こちらをじっと見つめているメリエル。

エディと母さんもそれに気づいて振り返ってくる。

3人共こちらに歩み寄ってくる。ああ、僕はここにいってもいいのだろうか。

既に出上がっている形に新しいものが入る。

良くも悪くもその場所は変わっていく。

俺をこの中に入れてくれるならどうか、神様。いい方向に変わって欲しいです。

この後、世間一般の常識を叩き込まれた俺はようやく世間一般の物の価値を知ることとなるのだった。

.....

朝の1時、ようやく解放された俺は新しく引かれたシーツの上につつぶせでベッドにつつぶす。

「主殿、つかれておるようじゃの」

「ああ」

「肩でも揉んで差し上げようかの？」

「ああ」

肩に重力を感じ、ふにふにとした感触が肌を撫でる。

ふと先ほどからの声に疑問を感じ、視線を肩の辺りへと移動させる。

黒髪黒瞳の手のひらサイズの人形が動いていた。

「え」

いや、落ち着け俺。

もう一度深呼吸をして視線を肩の辺りへ。

「うん・・・しょ」

生気の宿った黒い瞳、手のひらサイズの人形が・・・。

「夢・・・か・・・」

納得した俺はすぐに思考を放棄する。これ以上考えちゃダメだ、頭がもたない。

「夢じゃとは失礼な、これでもれっきとした魔具なのじゃよ！」

魔具か、それなら理解も出来る。だが・・・。

「魔力は？」

そう、魔具の発動には魔力の供給が不可欠。しかもその属性を発動できないと発動しないという厄介なものが魔具だ。

あの棍も魔具なのだが、その場にいたギルド員やエディ、メリエル、レミリイなどが魔力を流しても使えなかった。

言わずもがな、俺も発動させることは出来なかった。色的に光だと思っただ。

つまり、彼女(?)は外見からしてもおそらくは・・・。

「さっきの人形が魔具だったわけ？」

そう、それ以外にはありえないのだ。大穴としてネックレスが、

という可能性もなきしにもあらずだが。

「そうじゃ！我はリユージの案内役だったこともあるのじゃぞ」

「え？流時叔父さんの？」

それは驚いた。流時さんなら持って帰りそうだから。

「うむ、しかし流時は我が動けなくなるからと連れて行かなかったのじゃ！納得いかないのじゃ！」

「なるほどね、俺は流時叔父さんの甥の隆久って言うんだ。君の名前は？」

肩から手のひらにのせて聞いてみる。昔の流時叔父さんを知っている数少ない1人だ。それにエディたちが何の反応を示さなかったのが気になる。

「我はイザヨイ。タカヒサよ、よろしく頼む」

挨拶を交わし、指と手をくっつけて握手をする。

「我の言葉はリユージやその同郷の者にしか聞こえないのじゃ。うっかりと我に話しすぎると痛い子になるから気をつけるのじゃな」

「ホッホッホ」と老師のような口調で笑う。

「話す時は小声で聞こえないようにの。我は異界の魔力で発動する魔具。他にはない特殊な力があるのじゃ」

しっかりと胸を張る。胸ないけど。

「一つの属性の魔法を溜め込み放出することが出来るのじゃ。水道を開発するまでリユージは生活水として使用しておったの」

「じゃあ、俺もしばらくはそうするよ」

悪いがとにかく俺は疲れてるんだ。できれば明日にしてくれ。

「仕方ない、そろそろ魔力が切れるのじゃ。明日になったらまた魔力を流すのじゃぞ！」

説明は置いて置いてくれ、俺はしっかりと睡眠を取るんだ！体が持たない！

決心した俺は、朦朧とした意識をゆっくりとまどろみの中へと沈めていった。

息抜き・後編（後書き）

文字数が徐々に減っていることに皆さんお気づきでしよつか？
そして描写も日々下手になっていくという。。。。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0305y/>

異世界冒険モノ（タイトル版）

2011年11月10日02時22分発行